津軽の阿片に関する新知見

松木明知

日本医史学雑誌第三十巻一号
昭和五十九年一月三十日発行　昭和五十八年二月二十八日受付

1

口碑[1]の伝えるところによれば、わが国へのケシの渡来は、足利義満の時代にインド方面から直接津軽の地へ将来されたものであるという。

現在までの研究によっても、右の口碑を実証する証拠は何もないが、往時京阪ではケシから採取する阿片を「津軽」と称したことは、右の口碑の真実性を示唆するものとも考えられる。

さらに京阪はもちろんのこと、九州、中国、四国など西日本における文化年間以前のケシ栽培の記録は、著者のこれまでの二十年にわたる調査によっても探索できなかった。

したがって日本におけるケシ栽培の研究には、津軽における栽培の実証が極めて重要なものであることが理解されるであろう。

2

著者[2][3]のこれまでの研究によって、津軽におけるケシ栽培の歴史は左に記すように元禄十二年（一六九九）が上限であった。

元禄十二年[2]九月南袋の内壱町歩へ芥子蒔付被仰付

さらに翌十三年（一七〇〇）には、「南袋[2]、千年山、上野の三ヶ所の御菜園芥子花盛りに付きあふよう取らせ候事」とあって、ケシの植栽が単なる鑑賞のためではなく、あふよう、つまり阿片の採取を目的としたものであったことが理解される。

しかし元禄十二年（一六九九）から足利時代までは年代に相当の隔りがあり、元禄十二年より以前のケシ栽培の記録の発見が期待されていたが、今回著者は、これより十数年以前の記録を発見したので報告する。

3

弘前藩日記を整理分類した永沢得右衛門の『津軽史[4]』には、阿芙蓉に関して左の記事がある。

元禄三庚午年

一、六月一日　御薬御用ハ阿芙蓉取せ候ニ付、在々へ罷出候御坊主並小人、先格之通賄可申付趣山田源右衛門へ申渡之

「御薬御用」「阿芙蓉取せ」とあるから、ケシの栽培は鑑賞用でなく、「阿芙蓉」の採取を目的としたものであることが明確である。「在々へ」とあるから、ケシが一ヶ所にだけ限定されて植栽されていたのではなくて、弘前近郊の村々の中、少なくとも数ヶ所に分散栽培されていたことも理解されるであろう。

さらに重要なことは、「先格之通」とあることで、これによって少なくとも元禄三年（一六九〇）以前にもケシの栽培が行われていたことが容易に推定されるのである。

そこで、さらに元禄三年以前の記録を採索してみると、元禄十二年（一六九九）を溯ること十六年の天和三年（一六八三）にケシが植えられ、阿片が採取されている記録が左のように披見された。

天和三癸亥年[5]

一、五月廿九日やかん草　阿芙蓉

一、からす扇之事　但菜と花

一、阿へんの事

一、六月五日　略　弘前町中ニて取候阿芙蓉正味拾七匁三分有之由、御歩行目付和嶋安左衛門逢坂善助申立て

一、阿へん取ニ在々へ遣候表坊主四人、手伝小人六人、一日ニ三度宛逗留中賄可申付旨対馬万右衛門へ申度之

一、六月十七日　阿芙蓉正味弐匁九分弘前寺社方、同正味三拾八匁九分在々より右の阿芙蓉和嶋安左衛門、相坂善助取せ之候由注進之

この記録によって、津軽におけるケシ植栽年度の上限は天和三年（一六八三）と、従来判明していた元禄十二年（一六九九）を十六年も溯ることができたのである。

就中注目すべき点は、天和三年当時、ケシは、弘前のみならず、近郊の村々でも植え付けられており、さらに阿片の採取は、弘前藩によって規制されていたことである。

阿片の採取量についてみると、六月五日と十七日の二日だけでも合計約六十匁、約二二五グラムほどになり、決して少なくない量である。

この頃弘前藩では江戸などから多くの植物、薬草などを移入植栽されているが、その中にはケシは包含されていない。(6)

4

今回発見した記録は、ケシがインドから直接津軽に将来されたという口碑を実証するものではないが、津軽におけるケシの栽培の上限が、従来考えられていたよりも十六年も古いものであることが判明した。

しかし天和年間と足利義満の時代との間には、まだ二百余年の空白があり、これを埋める新史料の発見が期待される。

文献

(1) 町口英三　本邦産阿片に関する研究及実験　衛生試験所彙報三〇号、大正十五年
(2) 松木明知　津軽の医史　津軽書房　昭和四十六年　一五五頁
(3) 松木明知　続津軽の医史　津軽書房　昭和五十年　五九頁
(4) 津軽史　十二巻　みちのく双書特輯　青森県文化財保護協会　昭和五十七年三月　二三三頁
(5) 同書　三五一号　三五二頁
(6) 同書　三三四号　三三九頁